

木 芽 峠

山 本 元

福麻呂歌宴

可徹流末能美知由可牟日波伊都波多能佐加爾

蘇泥布禮和禮乎事於毛波婆

木芽峠は越中國敦賀郡と南條郡との境に在り、明治廿年の、敦賀町より東浦村、南條郡河野村等を經て武生町に至る敦賀道の開鑿までは、西近江道として京より北陸道を下向するには必ず通過すべき名高き險道なりき。即ち西近江より七里半越を越えて敦賀郡に入り、道口より葉原、新保を經て木芽峠にかゝり、今莊にて東近江より來る北陸本道に合して國府(武生)に達したり。此路は源平盛衰記の道順と今も同じ、中世以後の軍旅は皆此路を取り、明治十年、明治天皇北陸御巡幸にも此峠を過ぎられたり。此峠は上古よりの往來にあらず

二

萬葉集十八 椽久米朝臣廣繩之館饗田邊史

この歌は天平二十一年三月二十六日、越中にて橘諸兄の使者として下れる田邊福麻呂を饗したる時越中守大伴家持の詠めるなり。即ち福麻呂が京に上るに歸山路を越ゆる時には五幡坂にて袖を振れと云へるなり。五幡は木芽峠路にあらで敦賀郡東浦村五幡是なり。此路は敦賀より五幡、杉津を經て南條郡境の山中峠を越えて山中、鹿蒜に出でたるものにて、是此歌の「歸末」なり。是奈良朝以後の北陸道なり。東鑑養和元年九月の條に

先陣根井太郎、至越前國水津、與道盛朝臣從軍已始合戰

水津は今の杉津ナイなり。木曾義仲の先陣根井太郎、國府(武生)より歸山路を取りて杉津に出で、陣したる者なり。藤原隆信集に(隆信元久二年卒年六十

四

その夜も明ぬれば、すいつのわたりとて、しほうみのなみも
いさげはしげなる、ふねにのりてこき出るも、わたりこそ
いへといさはるかに見わたされたるほおそろしくさへおも
ひつ、けられて、いそにつきて、あみひくをみて、
わくあみの沖を遙にめくれども都にのみもひく心かな

こは隆信が前夜、敦賀津に泊りて杉津に渡りしな
れば、即歸山路を取りて、北陸路を下りたるなり。

此集より推して考ふれば、萬葉集四に笠朝臣金村
の敦賀津より舟出して田結浦沖を通りたる歌ある
も、杉津へ渡りし者にはあらざるか。敦賀より杉
津までは海上凡三里あり、渡し舟に便宜しき地と
見ね、北陸鐵道開通までは便船の便ありたりき。

又源平盛衰記四、白山神興登山事の條に

安元三年正月晦日辛未日、吉日也トテ御門出アリ、同二月五
日丙子ヲ吉日トシテ早松社ヨリ願成守ヘツカセ給フ、(中略)
十五日ニハカヘルノ堂、十六日ニハ水津ノ浦、十七日ニハ敦
賀津北ノ端金ノ崎ノ觀音堂ヘ入奉ル、
と見ねたり。是も歸山路なり。

今の鹿森村歸より此歸山路西十町許に新道(下新

道上新道)といへる邑あり、此處より道分岐して
二屋村を経て木芽峠にかゝる。新道の名はこの木
芽峠道の新しき道なるが故に負ひし名なり。從來
の地誌に、木芽峠を以て歸山なりとなせる者ある
は、この新道の名に心附さりし臆説なり。歸山路
は既に説きしが如く徵証あり。類聚國史八十三、
政理部に

淳和天皇天長七年二月庚午、越前國正稅三百
東鐵一千延、賜作彼國鹿森山險道、百姓上毛
野陸與谷山、(原本鹿保山とあり、大日本倉
貨志に據て改む、)

とある鹿森險道は、山中峠を指すか或は木芽峠を
指すか詳ならず。敦賀志稿に岡野吉孝の説を載せ
たるに、右の類聚國史の文を引て『恐くは此時ぞ
彼坂を開かれたりけん、其坂といふは今云木芽坂
なり』とあり。その險道といへるは木芽峠の如く

なれども、確なる証左は管見に及はず。若此説の如く木芽峠の事ならば、此時にぞ開鑿されたるならん。延喜式の驛名に松原、鹿萩あり、兩驛の間の驛路は山中峠なるか、木芽峠なるか詳ならず、此説を証するに足るべし。今敦賀、歸間の里程を比較するに山中峠路は木芽峠に比して一里余の遠路たり。當時三十里(凡今の五里)一驛の制なれども、土地の便宜にて多少遠近ある者なれば、一里許(今の里程)の差違はあるべし。されば里程を以てしては孰の道とも定め難し。されど山中峠路の方は險路にあらずして、此以後と雖も往來したりし事、既に前に擧げたるが如し。されば驛路も亦此山中路たりしなるべし。紫式部集に

みやこのかたへきて、かへる山こねけるに、よひさかさいふなるころの、いそわりなきがけちに、こしもかきわつらふを、おそろしとおもふに、さるの木の葉の中よりいさおほくいできたれば

ましも猶遠方人のこゑかはせわれこしわふるたこのよひ

こは寛弘の頃、越前國府より都へ歸る時の歌なり。よひさかといへる地名今詳ならず。木芽峠路に越坂モチカと云へる邑あり、これよひさかの轉訛なりとせば、此かへる山は木芽峠にして、鹿萩險道も木芽峠なりとすべけれども、よひのをつと轉訛したりとすは強いたりと云へし。其頃の地名は一般に其後甚しき轉訛ありしとも見えず、越坂の隣村なる葉原の如き、平家物語に飯原イハハラとあり、今もハン原と稱せり。

木芽峠の名の初て見わたるは源平衰盛記とす。同書廿八、源氏追討便附燧城平取陣事の條に

荒乳ノ中山ニ懸テ天熊・國境・匹壇、三日行越テ、敦賀津一著ニケリ、其ヨリ井河坂原・木邊山ヲ打登、新道ニ懸テ還山マテ連タリ

萬葉仙覺抄十八、前に引ける歌の解に

いつはたこねはすいつへいつ、きのへこねはつるかの津へ出る也、きのへこねはこにさかしき道なり

五幡を北すれば杉津、南すれば敦賀津なり。本書の記述聊か充分ならず。刊本にすいづを海津とあるはよろしからず。木芽峠よりも海津へ出づる事は同じ。さて此頃より木芽山の名見わたれば、此時代を溯ること遠き昔の開鑿にはあらざるべし。天長二年の開鑿とすれば凡三百五十六十年許も昔の事なり。又鎌倉時代以後は専ら木芽路の往來のみとなりて、山中峠の方の往來は物に見わすなれり。木芽山、仙覺抄、源平盛衰記には木邊山と見ゆるか、今も土地の者はきのべ山と稱せり。後の者ながら義經記七、三口關とほり給ふ事の條にも、木邊といふ山を越てとあり。仙覺抄刊本、木芽山とあるは後の改竄なり。道元禪師の詠を集録したる傘松道詠に

越前路より都におもむきし時、木芽山といふ所にて

草の葉に首途せる身の木の目山雲に路あるこちこそすれ

此詠は建長五年、禪師上京の時の詠なりと傳へら

るれども、本書は陽方雨山の編成にして、若干首は後の人の者の纒入ありとの説もありとの事なれば、この詠も本邊を木目と轉訛して傳へたるか或は訂正したる者なるべし。素より確なる証とはなすべからず。木芽の名の見わたるは、大平記に木の目山とあるを始とすべし。

義經記七、三口關とほり給ふ事の條

夜もすてにあけ、れば、荒乳の山を出て越前の國へいり給ふ
荒乳の山の北のこしに若狭へかよふ道あり、のうみ山に行く
みちもあり、そこを三日とせ甲けるへ中略 此山の峠より東へ
向ふてのうみ越にかゝりて、ひうちか城へ出で、越前國こつ
にかゝりて、へいせんじを拜み給ひて

三口は敦賀郡道口村なり道口より西るは若狭道東するは木芽道なり。而てこれより燈城に出で國府に至るべし。故にこののうみ山も木芽峠の別名の如く思はるれども、のうみ越は近江伊香郡片岡村に在りて、椿坂より中河内に越ゆる坂なり。今は椿坂峠とも云ふ。玉葉養和元年十月十日條に

北陸道知度清房(已上故禪門子息等也)此外重
衡卿資盛朝臣等、野宇美越同可向北陸云々、
源平盛衰記二十八、源氏追討使條に

東路ニハ片山春ノ浦、鹽津宿ヲ打過テ、能美越、中河内、虎杖
崩ヨリ還山ヘン打合タル、

と見たる者即此道なり。義經記誤れり。但、同
章の末に木邊山打越てとあるぞよろしき。

三

太平記十七に延元々々年十月、洞院實世、新田義貞
等、東宮一宮に供奉して山門より北國に下りしに
荒乳の中山をば越前守護足利高經さし塞ぎしかば
海津、鹽津より道をかへて木芽目峠にかゝりこの
峠にて大雪に遭ひて士卒凍死する者あり、十三日
敦賀津金崎城に入れりとあり、この木芽峠は荒乳
の中山(七里半越)の誤なり。太平記は十日山門出
發、十三日敦賀着となせども、實は九日夜山門出
發、十日敦賀に着し給へり。其事は菅政友氏か

恒良親王叡山に於て受禪す(史學雜誌十號)に
辨せられたる如く、白河證古文書、十一月十二日
金崎より出されたる繪旨に、去月十日、所有臨幸
越前國鶴賀津也とありて、十月十日着の事は確實
なり。元弘日記裏書に十月九日、東宮并尊良親王
義貞等越前國とあり、梅松論に據れば夜の御發
興と見へたれば、九日夜の御出發とすべし。然れ
ば一日程にて敦賀に着し給ひたり。叡山より海津
に出で、鹽津より迂回して木芽峠に出づるは、中
河内途を経て、椽木峠を越へ板取に出でさるべか
らず。北道に由れば、敦賀に至る約二十餘里あり。
然る時は行軍一日程の道程にあらず。且椽木峠は
當時も至て難所なりしなるべし、盛衰記にも虎杖
崩とあり、崩とは難所なるが故なるべし。朝倉氏
の時にありては、其軍を近江に出すには、多くは
木芽峠を越て敦賀に出でたり。是亦椽木峠の難所
たるが爲なり。今の北陸道としての道路は、柴田

勝家、越前に封せられてより、安土へ參勤するに敦賀へ迂回するは不便なるが爲に、開鑿したるなりと傳へらる。(越路帥)殊に此途は木芽峠よりは積雪高く徳川時代に福井侯等の江戸參勤の際にも積雪甚しきは此路を避けて、木芽峠越に敦賀に出で、刀根越を木本に出でたり。かゝる所なれば、義貞等の軍、木芽峠にて大雪に困厄するならば、

是より先き此峠にて遭遇困厄すべきなり。太平記に據れば、義貞等、金崎城に入りて、逗留一日にして脇屋義助を柚山城に遣し、後援を得んとせり、若しそれ此路に出でたりとせば、板取村より柚山は近く二里許に在り、然るを木芽峠の險路を越ねて五里許なる金崎に入りて、更に義助等を柚山に遣すとは不審ならずや。梅松論には

其後遣すがら哀なることども多かりけり、荒茅の中山にて大雪に逢て、軍勢とも寒の爲に死す、去ながら義貞は子細なく越前國に下着し給ひて

いあり。一日程として此道を探らざるべからず

之に従ふべきなり。その士卒の凍死も此山にての事なり。後の者ながら氣比社家角鹿計富の編述したる氣比俗談(元祿十四年刊)にも、氣比氏治、五百騎にて七里半に出で、迎へたることを載す。此書は社家の傳に據りて書綴り、書紀以下所載社記と同異すと雖も不改之とあれば、氣比社家の傳説も七里半越なるを知べし。

太平記は本條のみならず、凡て木芽峠の位置に就て誤れり、即ち近江路より敦賀に入るには荒乳の中山と木芽峠との兩路ありと心得、木芽峠の敦賀より更に北陸道に入る道たるを知らざりしなり。

其一二を指摘すれば、二十一、鹽治判官讒死の事

北國の官方類に起りて、尾張守黒丸の城(吉田郡)を落されぬと聞ければ、京都以の外周章して、助の兵を下さるへしと評定あり、則ち四方の大將を定めて其國々へ勢をそ添られける、(中略)佐々木三郎判官氏賴は江州の勢を率して、木目嶽を打ち越にて敦賀津より向はる。

三十、高倉殿京都退去の事

只今夜々のまぎれに篠峯越に北國の方へ御下り候ひて、木目、荒血の中山を差懸がれ候は、越前に修理大夫高德、加賀に富樫介、能登に吉見、信濃に訪諏下宮祝部、皆無二の御方にて候へば、此國々へ如何なる敵が足をも踏み入れ候べき

蓋し刀根越を以て木芽峠と思へるなり。義貞等金崎城に據りてより、柚山との往來は常に木芽峠を越わざるべからず。瓜生保等の金崎の後攻するにも亦た越わたる所なるに、太平記の少も記す所なかりしはこの故なり。猶太平記、木芽峠凍死の條に、河野土居得能は二百よきにて後陣にうちけるか、天ノ曲にて前陣の勢におい敗れ、ゆくへき道を失ひて、鹽津の北におり居たりけるを、佐々木の一族と熊谷と、こめてうたんとしける間、あひかゝりにかゝつて、皆さしちかへんとしけれ共

(下略)とあるも、地理誤れり。天曲は今は劔熊と稱す、海津より敦賀に入る道なり、鹽津の北に非ず。又海津、鹽津より木芽峠にさし懸るならば、天曲は通行すべからず。此通に出でなば荒茅山に

かゝるべきなり。然らば太平記に云ふ足利高經荒乳中山を扼する事は如何と云ふに其事なかりし者なるべし、梅松論には荒茅の中山の事を記すと雖も、其事見えず。伊豫河野土居系圖に土居通増、同四年、到于越前之時、雪中道路被圍大敵、不堪至寒自殺、從士三百餘人、悉墮命訖とあるは、或は太平記に據れる者なるべし。若然らず、別の傳ありたりとするも、大敵とは太平記の如く、熊谷等を指すなるべく、當時鹽津の土豪熊谷の足利方として多少抵抗を試みたることはあるなるべし。

宮崎縣西都原古墳 調査報告

文學士 濱田耕作

梅原末治

余等は昨年末より本年一月初旬に亘り、宮崎縣